HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高校生を対象とした多元的アイデンティティ尺度の検討
Author(s)	村井, 史香; 加藤, 弘通
Citation	子ども発達臨床研究, 14, 17-21
Issue Date	2020-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.14.17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77560
Type	departmental bulletin paper
File Information	040-1882-1707-14.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

資料論文

高校生を対象とした多元的アイデンティティ尺度の検討

村井　史香[1]・加藤　弘通[2]

Investigating the Scale of Plural Identities for High School Students

Fumika MURAI, Hiromichi KATO

要　旨

多元的アイデンティティとは、場面ごとに出てくる複数の自分のどれもが、本当の自分であると感じられる自己意識のことであり、現代青年のアイデンティティの在り様の一つとして注目されている。本研究では、高校生を対象に、社会学領域で作成された多元的アイデンティティ尺度を使用し、尺度の信頼性および構造を確認することを目的とした。その結果、想定された 3 因子構造とは異なる、2 因子構造となり、尺度の信頼性も不十分であることが明らかとなった。また、“自己複数性”、“自己拡散”、“自己一貫思考”のそれぞれに設定された項目が同因子内に混在しており、因子の解釈が困難であった。よって、今後、多元的アイデンティティを捉える上では、新たな尺度の作成が必要となる可能性が示唆された。

キーワード：多元的自己，アイデンティティ，高校生
Key words：Self-Pluralism, Identity, High School Students

問題と目的

Erikson（1950）は、青年期の発達課題として、アイデンティティの確立を挙げている。アイデンティティとは、“自分とは何者か”という問いに答えることであり、斉一性・連続性をもった主観的な自分自身が、周りから見られている自分と一致する感覚（谷，2001）をさす。アイデンティティを確立する過程においては、社会的な遊びを通した役割実験が行われ（Erikson, 1959）、一時的にそれぞれの役割に同一化することで、多様な自己を持つこととなる。しかし、社会的な場面に応じて複数の自己を持つことは、自己の斉一性・連続性を混乱させ、不安や抑うつと関連するとされる（Block, 1961）。そのため、従来のアイデンティティ論においては、さまざまな役割への同一化による自己の複数化は一時的なものであり、それらは次第に統合されると考えられてきた（Erikson, 1959）。

しかし、現代社会は、Erikson（1950）がアイデンティティ論を提唱した時代とは大きく異なっている。現代では、一人ひとりが果たす社会的な役割

[1] 北海道大学大学院教育学院　博士後期課程
[2] 北海道大学大学院教育学研究院　准教授

10.14943/rcccd.14.17

や立場は多様化し（Gergen, 1991）、また、それらの役割を同時に遂行する必要が生じてきた。それぞれの場から与えられた役割に同一化するのであれば、自己を統合し、斉一性・連続性を持たせることは今まで以上に困難な作業になる（木谷，2017）。実際に、心理臨床の立場からは、社会的場面によって異なる自己を一貫した自己に統合することを求めることなく、複数の自己を使い分ける青年の増加が示唆されている（成田，2002；高石，2009）。では、社会との関係性の中で形成されるアイデンティティには、社会の変化に伴って、構造そのものに何らかの質的変容が生じるのだろうか。

社会学者の浅野（1999）は、現代青年の対人関係に着目し、自己の多元化を指摘した。つまり、状況や付き合う相手によって関係の在り方が変わるという状況志向型の人にとっての自己は、ひとつの自己イメージによっては捉えきれず、場面ごとに出てくる複数の自分のどれもが、本当の自分であると感じられているのだという。辻（2004）は、こうした青年の自我構造を捉えるための新たなモデルを提唱した（Figure 1）。Figure 1 の(a)のような同心円上の自我をイメージすれば、その中核から離れた「部分」をもってするつきあいは、すなわち、「心の深いところ」や「本音」を隠した表層的で希薄な対人関係を意味する。一方で、(b)のように、複数の中心をもち複数の円がゆるやかに束ねられた自我構造をイメージするならば、部分的な関係は同時に表層的でない関係でありうる。辻（2004）は、(b)のような自我構造を「多元的アイデンティティ」という在り方として示した。多元的アイデンティティとは、「場面において異なる自己をもつこと、明瞭な自己意識をもつこと」と定義され、場面によって多面的な自己を持ったとしても、それがすべて本当の自分であることが可能となるため、葛藤や混乱が生じることがない（木谷・岡本，2015）という点で、従来のアイデンティティ論とは異なっている。心理学領域では、木谷（2017）、木谷・岡本（2018）が大学生を対象として、現代青年のアイデンティティに関する実証的な検討を行った。その結果、現代青年のアイデンティティの在り方には、Erikson（1959）が述べたような、適所を選択し、重要な他者からの承認によって内的同一性と社会的同一性を獲得する在り方と、辻（2004）のモデルにあるような、多元的アイデンティティを形成する青年の 2 つのタイプがあることが示唆された（木谷・岡本，2018）。

しかし、自己の複数性や多元的アイデンティティという概念は、社会学領域において提唱されたものであり、心理学領域における自己、アイデンティティの概念とは異なるのではないかとの意見もある（天谷，2019）。木谷（2017）、木谷・岡本（2018）は、一連の研究の中で、多元的アイデンティティを Erikson のアイデンティティ論から捉えようと試みているが、木谷・岡本（2018）で使用された尺度は、社会学者である岩田（2006）において使用された自己複数性尺度であった。ただし、心理学領域における多元的アイデンティティの知見は未だ数少なく、Erikson のアイデンティティ論に基づき、自己の多元化をとらえる尺度は見当たらないのが現状である。また、木谷・岡本（2018）では、調査対象者が大学生に限定されていることから、他の年齢群に対して、当該の尺度が使用できるの

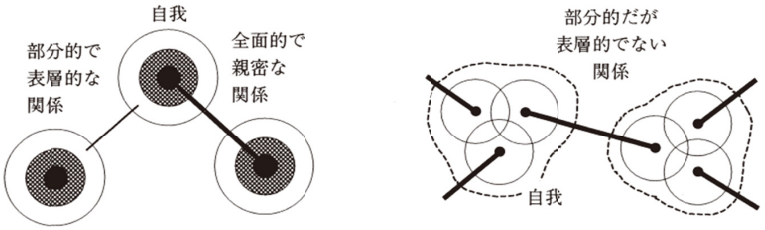


Figure 1　自我構造の 2 つの模式図（辻，2004）

かは明らかとなっていない。

そこで、本研究では、多元的アイデンティティ尺度を高校生に使用し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とする。具体的には、岩田（2006）が作成した自己意識尺度を、高校生を対象に実施し、尺度の構造を確認することとする。

方　法

1．調査協力者

公立高等学校1校に在籍している高校2年生228名（男性80名，女性144名，不明4名）を対象に、質問紙調査を実施した。そのうち、欠損値のある者（N＝22）を除いた、206名を分析対象とした（男性71名，女性135名）。平均年齢は16.20歳（Range：16-17，SD ＝ 0.71）であった。

2．調査手続き

調査は、学校の承諾を得て、2015年5月に行われた。高校の授業時間を利用して、調査協力者に一斉に質問紙を配布し、その場で封筒に入れて回収した。調査は無記名式であり、回答は任意であること、いつでも回答を拒否・中断できること、回答を拒否・中断しても調査協力者に不利益は生じないことを口頭で伝えた。

3．調査内容

質問紙は以下の2項目で構成される。1）フェイス項目：年齢、性別、2）多元的自己尺度（10項目）：岩田（2006）が使用した自己意識を問う尺度である。自己の多面性の感覚について表す「自己複数性（3項目）」、自己拡散の感覚について表す「自己拡散（4項目）」、自己の一貫性を志向する程度を表す「自己一貫思考（3項目）」の3因子から成る。“以下の質問は、あなたが日頃、他者との関わりの中で、「自分」というものをどのように認識しているかを知るためのものです。それぞれの質問について、今の自分にもっともよくあてはまると思うところに○をつけてください”と教示し、“1. そう思わない”から“4. そう思う”までの4件法で回答を求めた。

結　果

多元的アイデンティティ尺度10項目について、岩田（2006）の3因子モデルで確認的因子分析を行った。その結果、適合度が不十分であり（$\chi 2(32)$ ＝126.20，$p < .00$，GFI＝.89，AGFI＝.80，CFI＝.72，RMSEA＝.12）、各因子のα係数も“自己複数性”で.58、“自己拡散”で.55、“自己一貫思考”で.42と、内的一貫性は極めて不十分であった。そこで、探索的因子分析を行うこととした。MAPと対角

Table 1　多元的自己尺度の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転後）

	F1	F2	h^2	M	(SD)
第1因子（α＝.69）					
場面によってでてくる自分というものは違う（自己複数性）	**.768**	.006	.594	1.91	(.87)
どこかに今の自分とは違う本当の自分がある（自己拡散）	**.712**	.211	.702	2.10	(.89)
なりたい自分になるために努力することが大切（自己一貫志向）	**.559**	−.255	.236	1.88	(.92)
第2因子（α＝.60）					
自分がどんな人間かわからなくなることがある（自己拡散）	−.024	**.696**	.469	2.38	(.99)
自分には自分らしさというものがあると思う（自己一貫志向）	.228	**−.535**	.216	1.97	(.80)
自分の中には、うわべだけの演技をしているような部分がある（自己複数性）	.079	**.461**	.256	2.36	(.95)
仲のよい友だちでも私のことをわかっていない（自己拡散）	.000	**.455**	.207	2.64	(.88)
因子間相関	F1				
F2	.50				

SMC 平行分析の結果を参考に、因子数を 2 に設定した上で、最尤法、プロマックス回転を用いた。その結果、3 項目がいずれの因子にも .40 未満の因子負荷量を示した。当該の 3 項目は、“自己拡散”から 1 項目（“他人からみると、私は好みや考え方にまとまりがない人間のようだ”）、“自己一貫思考”から 1 項目（“どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切”）、“自己複数性”から 1 項目（“意識して自分を使い分けている”）であった。そのため、これらの 3 項目を除外し、再度最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。得られた因子パターンを Table 1 に示す。2 因子での説明可能な分散の総和の割合は、55.0%であった。α 係数は、順に .69，.60 であり、内的一貫性は不十分と言わざるを得ない結果となった。また、第 1 因子、第 2 因子ともに、岩田（2006）において“自己複数性”“自己拡散”“自己一貫志向”のそれぞれに設定された項目が混在しており、因子の解釈が困難であった。

考　察

本研究の目的は、高校生を対象として、多元的アイデンティティ尺度の使用を検討することであった。本研究において、高校生を対象に多元的アイデンティティ尺度を使用した結果、岩田（2006）の 3 因子構造とは異なる、2 因子構造となった。また、第 1 因子の α 係数は .69、第 2 因子の α 係数は .60 を示した。パーソナリティ尺度の α 係数は、.70 以上が目安であるとの意見（石井，2014）を踏まえれば、尺度の信頼性は不十分であると考えられる。さらに、本結果における各因子の項目には、岩田（2006）において、“自己複数性”“自己拡散”“自己一貫思考”のそれぞれに設定された項目が混在しており、因子の解釈が困難であった。

以上の結果について、以下 2 点の考察を加える。

第一に、項目の内容についてである。本尺度の項目内容には、“本当の自分”という単語が含まれるが、木谷・岡本（2018）において指摘されているように、従来のアイデンティティ論における自己拡散状態にある青年と、多元的自己を有する青年とでは、“本当の自分”に対するイメージが異なる可能性がある。しかし、本尺度の項目内容では、そうしたイメージまでは捉えることができないと考えられる。また、自己の多元化にも「素顔の複数化」と「仮面の複数化」という二つの方向性があり、同じ自己の多元化の中にも多様な自己意識があることが指摘されている（岩田，2006）。ただし、本尺度の“自己複数性”の因子には、「素顔の複数化（場面によってでてくる自分というものは違う）」と「仮面の複数化（自分の中には、うわべだけの演技をしているような部分がある）」の両方が含まれている。自己の多元化を数量的に捉える上では、より詳細に自己意識の分類が可能な項目内容を考案する必要があるだろう。

第二に、本研究における対象者についてである。本研究は、公立高校 1 校の高校 2 年生に限定されており、対象者に偏りがあった可能性がある。岩田（2006）は、本尺度を日本全国の 12 歳 ～ 69 歳という幅広い年齢層を対象に使用しており、本研究の対象者とは異なっている。また、木谷・岡本（2018）は大学生を対象に、自己複数性の 3 項目を使用し、尺度が十分な内的一貫性を備えていることを確認している（$\alpha = .80$）。本研究において、内的一貫性が不十分であったことには、対象者の偏りも影響している可能性が考えられる。

今後、心理学領域において多元的アイデンティティを検討していく上では、自己の多元化を十分に測定することのできる尺度の開発が期待される。なお、本研究の結果における、項目ごとの平均得点は $M = 1.88 \sim 2.64$ であり、“自己複数性”の項目に限定すると $M = 1.91$，2.36 といずれも低い。現代青年のアイデンティティの在り方として、そもそも自己の多元化がすすんでいるといえるのかについても、今後の検討が必要であろう。

文　献

天谷祐子（2019）．単一でない自己・アイデンティティの様態をどのように捉えるか？―木谷・岡本論文へのコメ

ント―　青年心理学研究，**30**，165-169.
浅野智彦（1999）．親密性の新しい形へ　富田英典・藤田正之（編）　みんなぼっちの世界―若者たちの東京・神戸 90's 展開編－（pp.41-57）恒星社厚生閣
Block, J.（1961）. Ego identity, role variability and adjustment. *Journal of Consulting Psychology*, **25**, 392-397.
Erikson, E. H.（1950）. *Childhood and society*. New York：W. W. Norton.（エリクソン , E. H. 仁科弥生（訳）（1977，1980）．幼児期と社会 1・2　みすず書房）
Erikson, E. H.（1959）. *Identity and life cycle*. New York：W. W. Norton.（エリクソン , E. H. 西平　直（訳）（2011）．アイデンティティとライフサイクル　誠信書房）
Gergen, K. J.（1991）. *The saturated self: Dilemmas of identity in contemporary life*. New York：Basic Books.
石井秀宗（2014）．人間科学のための統計分析―こころに関心があるすべての人のために　医歯薬出版
岩田　考（2006）．若者のアイデンティティはどう変わったか 浅野智彦（編）　検証・若者の変貌―失われた 10 年の後に―　（pp.151-190）勁草書房
木谷智子（2017）．自己の多面性と抑うつの関連に対するアイデンティティの間接効果の検討　広島大学大学院教育学研究科紀要第 3 部，**66**，143-149.
木谷智子・岡本祐子（2015）．青年期における多元的な自己とアイデンティティ形成に関する研究の動向と展望　広島大学大学院教育学研究科紀要第 3 部，**64**，113-119.
木谷智子・岡本祐子（2018）．自己の多面性とアイデンティティの関連―多元的アイデンティティに着目して―　青年心理学研究，**29**，91-105.
成田善弘（2001）．若者の精神病理―ここ 20 年の特徴と変化―　なだいなだ（編）〈こころ〉の定点観測（pp.1-18）岩波新書
高石恭子（2009）．現代学生の心の育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援　京都大学高等教育研究，**15**，79-88.
谷　冬彦（2001）．青年期における同一性の感覚の構造－多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成　教育心理学研究，**49**，265-273.
辻　大介（2004）．若者の親子・友人関係とアイデンティティ―16 ～ 17 歳を対象としたアンケート調査の結果から―　関西大学社会学部紀要 , **35**, 147-159.